



冬季小樽観光事業の新展開「スキー文化をアジアブランドへ」

小樽商科大学 教授 中川喜直

■スキーの文化的価値

平成24年2月小樽スキー伝来百周年を迎えます。その歴史は商大創立百年と縁が深く、小樽高等商業学校（現樽商大）渡辺龍聖初代校長が正課授業としてスキーを導入するために、新潟高田で行われたオーストリア将校レルヒのスキー講習へ苦米地講師を派遣し、市民へスキーを伝えたことに端を発します。この地獄坂スキー講習会はレルヒが旭川でスキー講習会を開催した実施日と同日開催になり、北海道では「もうひとつのスキー発祥の地」と言える出来事になります。明治末期、小樽の人口は9万人を超えて札幌を凌ぐ時代です。小樽では大正時代初頭から学校教育にスキー教育が入り、瞬く間に庶民へ広がりを見せました。また、スキー製造が明治から昭和後期まで盛んだったことを知るご年配の方々は多いと思います。このような背景の中、スキーで日本をリードする人材が輩出されてきたことや、スキー文化が育まれた事実を知る人は少なくなってきましたが、全国的にスキー人口がピーク時より1/3に減少し、現在は冬のレジャーの低迷とともにスキー産業全体が衰退しています。しかし、現在においても最多の冬季オリンピック選手を輩出した町を誇り、今なお少数ですが、毎年スキー留学に全国から学生が集まる名門地として知られています。また、全国のスキー指導員検定会が古くから小樽で開催される等でスキー文化が築かれてきました。

■アジアを誇るパウダースノー

2011年まで中国・北京郊外に人工雪のスキー場が19箇所建設され、そのスキー人気の勢いは裕福層を中心に膨らんでいます。また、韓国では2018年冬季五輪開催が決定し冬季スポーツへの韓国民の関心が高まっているところに加え、香港・シンガポールからもその雪景色に魅了されたリピーターが頻繁に北海道を訪問しています。中国韓国のスキー場は人工雪で覆われたスキー場で固くて転ぶと痛く、北海道のパウダースノーで滑ると上手になった感じがするとよく言われます。これが北海道の魅力の一つになっ

ており、小樽後志地方は大きな自然の恩恵を受けています。

15年前、ヒッチハイクをしていたオーストラリア人スキーヤーを乗せてニセコへ行きました。友人として行動を伴にする機会もありましたが、その後消息を知った時にはビジネスマンとして成功しニセコに定住していました。その素晴らしさに魅了され当地の価値を見出した多くのオーストラリア人が成功しています。

■スキーの品格

スキーは、生涯スポーツとして子供からお年寄りまで家族が長期滞在で楽しむ、世界共通のスポーツ文化です。中国では裕福層を中心にスキーが普及していますが、一般にもスキーへの関心は高く、商大の中国人留学生はほぼ全員が選択制のスキー集中授業を履修します。スキーは世界共通のコミュニケーションを図るためのツールでもあり、欧米諸国においてもまたアジア諸国においてもスキーが出来るようになり冬季レジャーを楽しむマナーを備えることは一流を目指す社会人にとって必要な教養です。

明治末期レルヒが開催した高田のスキー講習会へ東京の学習院学生がいち早く習いに出かけ、小樽は大学がスキー発祥の発信基地になりました。皇族は日本スキー発祥期からスキーを始め、大正12年に緑町を舞台に開催された第1回全日本スキー選手権は旧華族（朝香宮杯）を冠した大会として行われています。昭和5年から札幌で始まる宮様国際スキー大会は、数多いスポーツの中でも唯一宮様が記念された格調高く品格あるスキー大会です。

北海道に住んでいると身近にスキーが出来、スキーの意義について考えることはあまりないと思いますが、スキー発祥百周年を機にその付加価値を見直し、レトロ小樽の冬季観光としてスキー文化をアジア圏にアピールする手法を考える時期ではないでしょうか。観光地として巡るスキー発祥地碑、ジャンプ発祥地碑、スキー博物館などを新たに設置し、小樽を観光拠点にその文化遺産を外国語に翻訳しグローバルに展開してはどうでしょうか。